

ほっかいどうの防災教育検討委員会 第6回会議 議事録

日時:平成25年12月26日(木)

9:20~12:10

場所:北海道庁2階共用会議室

(事務局)

定刻となりましたので、ただ今から、「ほっかいどうの防災教育検討委員会」第6回会議を開催いたします。事務局を務めております危機対策課の木戸と申します。あらためましてよろしく申し上げます。お手元の資料、1枚目の次第の下に出席者名簿をお配りしております。本日、北海道町村会の熊谷委員からは、所用のため欠席する旨、事前にご連絡を頂いております。

それでは、引き続き、事務局より配付資料の確認をさせていただきます。【配付資料確認】

それでは協議事項の進行に関しましては委員長の岡田先生にお願いしたいと思います。

(岡田委員長)

本日は年末のお忙しいところ、お集まり頂きありがとうございました。かなり充実した資料があります。

本日は、前半で、防災教育の調査研究事業の追加調査状況や、先月終わりましたモデル的な防災教育講座の実施結果を踏まえたモデルテキストやDVD作成などについての意見交換を行いたいと思います。かなり内容がありますので、時間が限られていますのでなるべくコンパクトにいきたいと思います。後半では前回整理した中間取りまとめの内容を振り返りながら、北海道の支援機能のあり方について、支援の内容、ネットワークや一番肝心なところの議論の時間をとりたいと思います。終了時刻につきましては、12時を予定しておりますので、よろしく申し上げます。

それでは、協議事項1「調査研究事業に関する意見交換」に移りたいと思います。「(1)防災教育関連資料の調査について」説明をお願いします。

(事務局)

【資料1-1~1-3に基づき説明】

(岡田委員長)

ありがとうございました。ただいま説明がありましたが、何か、ご質問等はございますか。

(鈴木委員)

索引はどのような形になるのですか。

(岡田委員長)

知りたいときに、すぐそのポイントにいけるような。

(事務局)

そういうように配慮をして、最終的にはデータベースとなり、皆さんが利用しやすい配慮をします。

(鈴木委員)

災害の種類とかで検索できるということですね。

(岡田委員長)

キーワードを使って検索できるのですね。

(事務局)

最終的にはそのような形になります。

(岡田委員長)

ありがとうございました。それでは引き続き、市町村などにおける防災教育推進に必要な支援ニーズなどを把握していくということで進められておりますアンケート調査の実施状況及び集計結果の速報版につきまして、事務局から説明をお願いします。

(事務局)

【資料2-1~2-7に基づき説明】

(岡田委員長)

ありがとうございました。ただいま、自主防や町内会、教育委員会、大学、地域防災マスターに対する調査結果の報告を頂きました。小樽市女性防火クラブに対するヒアリング調査結果について、事務局より説明がありました。全体を通して何かご質問等はございますでしょうか。

(定池委員)

まず資料の確認なのですが、資料2-4-1の円グラフの数字の合計が100%を超えるように見えますが。

(事務局)

サンプル数とパーセンテージを並べて表記しており、分かりづらい表記となっておりますので、訂正いたします。

(定池委員)

地域防災マスターの方々はかなり熱心に書き込んで頂いているのですが、その中で共通している地域独自の課題が見られるのですが、この資料ではそのままのデータで書いて頂いており、例えばキーワード抽出などで具体的にこういう傾向が見られたという整理をして頂ければと思います。

(事務局)

はい。

(岡田委員長)

ありがとうございました。他に何かございますでしょうか。鈴木委員いかがでしょう。

(鈴木委員)

どうやって町内会の方に興味を持って頂けるかということですよ。札幌市内もそうですけれども、町内会の組織率も低くなってきているのですよ。町内会があればやるよ、これをやるよといっても誰も参加してこない。防災に関しての集まりをやっても中々参加してくれない、その上組織率が悪い、災害があったら何とかしてよという事態になるのです。あれがほしいこれがほしいということですが、実際の災害になると、ある物で何とかしなければだめなのですよ、災害の現場というのは常に創造の世界ですから、どうやったら自分達ができるのだろうか、ということを考えなければならないので、こういった研修会を開いてほしいということなので、やっていかなければならないのだろうなと思います。関心のない方にどうやって災害の現場で救っていかなければならないのかということですよ。

(岡田委員長)

それでは、若干ご意見がありましたけれども、それを踏まえた上で最終的なものを作って頂きたいと思います。先に進めさせて頂きます。

引き続き、道内6カ所で開催しました、モデル的な防災教育講座の実施結果につきまして、事務局から説明をお願いします。

(事務局)

【資料3-1に基づき説明】

(岡田委員長)

どうもありがとうございました。せっかくですので、委員の方で講師をされた方、視察をされた方で簡単に構いませんのでご意見を頂きたいと思います。

(定池委員)

厚岸での講座は行政職員の方が対象ということで、その方々が自分達の地域で防災教育を実践できるようになるための講座という認識で行ったのですが、そこがうまく伝わっていなかったのかなという部分がありました。受講者のアンケートを見ても業務で参加しましたと正直に書いている方が4名くらいいらっしゃって、そういう方々は業務で参加したとしても、こういうことを学びたいと思ったという回答を書いた方と、言われたので来ましたという態度の方と参加するモチベーションが違ったと思います。その方々は全然期待しないで行ったが意外に良かったと思えたのか、やっぱりこんなじゃだめだと思ったのかということでも、終わった後のアンケートの書き方が違うと思います。出来たら能動的な態度で受講された方が参加して良かったと思えたのか、他の研修もそうだと思うのですが、事前の態度と事後の態度みたいなどころの関連性が見えると、そういう方をいかにはげますかということと、あとモチベ

ーションの違いというところの講座の設定と、講師の伝え方とかが変わってくると思うので、その辺を知ることができれば今後活かすことができるのかなと思いました。あとは HUG もクロスロードも同じなのですが、答えが無いとか、難しいことを体験してもらおうということを目的としたときに、例えば DIG だとイメージトレーニングではあるのだけれども、みんなで地図に書き込み出来た物がある、そういう講座と、モヤモヤすることが目的で答えを得られないから、自分達で持ち帰って解決のための研鑽をしていきたいと思いますというパターンとでは、受講者の方の求めるもので満足度も違ってくるのだなというのが見えました。例えば自主防災組織とかはアンケートを見ても、解決策を求めている方と、自分達で解決したいからそのためのヒントを求めている方とは、考え方や受け止め方が違うと思うので、色々な方々のニーズに応じた防災教育の設計や、情報提供の仕方、アプローチの仕方というのを今後検討する必要があるのだなということを私自身も教えて頂きました。

(岡田委員長)

ありがとうございました。同じく厚岸で参加されている榎本委員お願いします。

(榎本委員)

まず感じたのは、最初に厚岸での講座を開催するときに意見として言わせて頂いたのですが、DIG とかクロスロードをやること自体が目的化してしまうのは問題があるというところで、その辺に参加された方に対して、講師の定池委員からきちんと説明があったので良かったと思いました。こられている方も行政の方がほとんどで、最初は堅い感じがありましたが、やっていくうちに楽しみながらやっていると感じて、クロスロードおもしろいねということは何人の方がおっしゃっていました。おもしろいねという感想を持たれたということは、どこかで使ってみようということに繋がっていくのかなと思いました。2日目の DIG ですが、DIG もかなりのボリュームで榎本さんが講師をしていたのですが、はじめに色々な過去の災害事例などで、今までの知識に無い部分をきちんと、こんなことが起きるのだよというイメージトレーニングをやっていましたし、出来上がった地図を今後どのように使っていくかという課題も見えたのかなと思います。対象として市町村の防災担当者の研修としては、効果の高い研修だったのではないかと感じました。

(岡田委員長)

他に何かございますか。

(榎本委員)

一つだけいいですか。岩見沢での講座で講師として参加したのですが、アンケートの中にも書きましたけれども、消防の方と市町村の防災担当の方と自主防災組織の方というのは、色々な防災を進める上で立場が違うと思います。消防の方も市町村の方もどちらかという自主防災組織の方に教える立場ですし、自主防災組織の方は自分達で、地域でやるというような面では、中々組み合わせとしては難しいなと感じました。私が話をさせて頂いたときに消防の方は色々ご存じだったと思うのですが、まずは興味を持って頂くような入口のところを丁寧に説明させて頂きました。DIG とかもそうですが、どうしても結果を求めることに力が入っているので、事前の備えとか知識とかのお話をさせて頂いて、そこから DIG を受けるのは、流れとしては良かったのではないかなと思っています。

(岡田委員長)

モデル講座をやった後に、効果についての測定とか、実施前と実施後のアンケートなどかなり丁寧にやっているような気がするのですが、上田委員はこの点についてはいかがでしょう。

(上田委員)

岩見沢と厚岸で受講者が 31 名と 34 名で、会場の都合などはあるのですが、人数も多いと面倒を見切れないとかあるのですが、40 人以下くらいがいいのかと。また、レベルが違う人に対して教えていくのは大変なのかなと思いました。

(鈴木委員)

消防団は聞かれても困るのではないのでしょうか。実際に災害対応をしている連中ですから、どういった危険がありましたか、などの質問をしてもね。

(岡田委員長)

引き続きモデルテキストなどの作成につきまして事務局より説明をお願いします。

(事務局)

【資料4-1、4-2に基づき説明】

(岡田委員長)

ありがとうございました。テキストとDVDの構成案の前半についてご議論頂きたいと思います。

(榎本委員)

知識編の目次にあります。各項目のところでは防災の3重要ポイントとあります。例えば6ページでは地震から命を守る3重要ポイントということで、家具の固定とか地震がきたら頭を守るとかありますが、ポイントを絞るといのは考え方としては良いのですが、はたして3つという数字にこだわるべきかどうかと思います。その事象によって4つだったり2つだったりということがあるかと思いますがいかがでしょうか。

(定池委員)

私もその点は違和感がありまして、例えば最初に3つポイントを挙げるのであれば、地震なら地震のチャプターがその3つの重要ポイントに帰結していくように繋がっていくような構成にしないと、最初に3つ挙げているけれども、これは地震が起きた直後とか直前の話ですよね。そのあとの対応をどうするという話になると、切れてしまうと思うので、最初に3つ挙げるのであれば、テキストのチャプターの中を読んでいくと重要ポイントに返っていくような作りにした方がいいですし、それが難しいのであれば、例えば日頃の備えというところで、この原則、この考え方は忘れずに、とか、この基本を押さえてという風にして、そのポイントに繋がる文章を入れていく形にすると、最低限ここは読もう、それ以外の何故そういうポイントなのかは本文を見ればわかる作りの方が、読んでいて違和感がないというか、流れとして見やすいのではないかと私も思いました。

(岡田委員長)

この件についていかがでしょうか。私も3つだったらどうやって選ぶのかだいぶ気になっていたのですが、基本的にはあまりこだわらない方がいいだろうと思うのですが、それよりもむしろ、始め3つとかいくつかを選ぶときに何を選ぶかなんですよね。どういう選び方をするか。漠然といっぱいある中から重要そうなものをただ持ってくれば良いというわけではないと思うのですよね。例えば6ページに記載してある、地震で死なない、怪我しないのが第一なのです。ところが、その次の話が1、2、3に分かれて書いてある気がするのです。もっとはっきりそれを打ち出して、とにかく地震が来たときに死なない怪我しないというのをまず優先させると。それから情報を集めて、どの程度の規模なのか、町全体が危ないのか、火災が起こっているのかという情報を集めて、どう安全に行動するかということに繋がってきますよね。ですから、ポイントを選ぶときにそういう選び方をしていくとそんなに問題ないのではないかという気がするのですけど。

(鈴木委員)

そうですね、災害は全部そうなのですけれども、まず、最初に自分の命を守る。そうしないと人の命を助けられないですから。そのために何をするかという話になるのですよね。津波はまず逃げろ。地震はまず身を防いで揺れが収まるのを待ってそれから逃げろと。まずそうしないと自分の命を守れない。自分の命をまもれないと人を助けることは絶対無理ですから。それがいちばん最初に来るわけです。そのためにこのときはじゃあ、何をするのだとか。風が吹いた台風の時には外に出ないとかあるわけですね。札幌市でも18号台風の時風速50mってどんなもんだらうって表に出て木に当たって死んだ人がいるなんていうのもあるわけですね。本州の人間に聞くと風速25m以上の時は外には出ないよと、慣れていないのだね、とそうなるわけですね。そういうものなのですね。命を守るためにどうするのか。台風だったらこういう風にしなきゃいけないとか、いっぱいあると思う。それを最初に見せないと、岡田委員長おっしゃったようにその中から選びましょうと。榎本さんの言ったように3つでいいのか、じゃあ2つでいいのかとなってしまうし、どういう基準で選ぶのだ、ということですよ。

(岡田委員長)

一般的には3つというのは標準的な数ではありますよね。多くしないということと、大事なところを落とさないということの両方を合わせると、3つというのは標準的な数ではあるのですよね。重要点は重

視するけれども必ずしも厳密なこだわりじゃないというくらいでいいのではないのでしょうか。やってみないとわからないので。他にございますか。

(甲谷課長)

私も3つというのは地域差もあれば行政のそれぞれの町が言わなければいけないことも少しずつ異なることもあるので、3つにこだわる必要はないと思っています。例えば地震で見る全体の構成については、3つのポイントの後に日頃の備え、その後に過去に学ぶ、また時系列になるといった具合に、やらなければいけないことが、10ページくらいの中で行ったり来たりしているような気がするので、やらなければいけないこと、日頃の備え、そして地震の仕組み、過去の災害のような順番に変えたらどうかなという気がしているんですけど、いかがでしょうか。

(定池委員)

過去に学ぶっていうのも、このように別で出して頂いてもいいんですけど、他のこうまじょうみたいなときに、なぜなら過去の災害ではこういうところが教訓になったからですって言う風に繋げてもらえると読む人もわかりやすいし、それを使って防災リーダーの方が研修するときにも根拠として説明しやすくなると思うのですよね。

(甲谷課長)

コラム的に入っていた方がいいですか。

(定池委員)

例えば建物の倒壊は11ページにありますけど、阪神淡路の時は建物の倒壊で多くの被害が出て、そのあと耐震化が、とかっていう話を入れられると読み物としても入りやすいのかなと。一つの案ですけど。

(岡田委員長)

そうですね、そういうリンケージ、全体の流れと流れやすさの中での他の課題とのリンケージを少し整理すればいいのではないかと私もそう思います。他にありますか。DVDについてはいかがでしょうか。

(定池委員)

繰り返し恐縮ですけど、DVDの実践編の最初にインタビューがつくのが納得できてなくて、私のイメージで皆さんと違うかもしれないんですけど、例えば私が街頭インタビューで、あなたは防災対策していますか。私やっていません、というのがDVDで全道に流れたらすごく恥ずかしいと思います。後に残りますよね。例えばですけど、えっ、防災教育。うーんなんだろうっていう一般の声みたいなのが顔が出た形で残るわけですよね。そしたら見たよ、見たよって言ってその人もちょっと恥ずかしい思いをするのではないかと思います。わざわざ市民の声を、生の声を入れるとリアリティがあるっていうのは分かるんですけど、どうしても声を入れたければ調査結果のグラフを入れるとか、防災教育に関してはこういう意識ですっていうのを入れる方法もあると思います。それか知識編と同じような流れで統一してしまって、北海道の自然の映像があって、恵みと災害、実際に北海道でよりよく暮らしていくための防災教育を進めていきたいと思いますというナレーションが入って岡田委員長の励ましのメッセージが入るといいうやり方もあると思うのですよね。岡田委員長のメッセージをより強調する流れに持って行ける方がより伝わりやすいのかなと思います。

(鈴木委員)

街頭インタビューの答えは何を期待しているのでしょうかね。私は分からないのよね、全然してないのよねっていうそういう答えなのだろうか。

(定池委員)

頑張っています、なのか、どうしたらいいのでしょうか、なのか分からないですけど。

(鈴木委員)

そのあと岡田委員長の話ですよね。

(定池委員)

たぶんあまりポジティブな意見ではないのですよね。もし自分がそれを言う立場だったら、残るのが嫌だなんて思うのですよね。

(鈴木委員)

大体DVDとか、たくさん持っていますけど、見ると最初の頭に、ほとんど無関心とか出来てないとか

っていう人が入ってきて、それじゃダメですよ、から始まっていく。その踏襲かなと思ったのですけど。

(榎本委員)

どこか災害を受けた地域の人たちが、事前にこういうことやっというて良かった、とか。あの時やっというて良かったでもいいですし、トレーニングしていたので役に立ったとかっていうのがあれば本当は良いのではないのでしょうかね。

(鈴木委員)

あの時こんなトレーニングしておけばこんな風にはならなかったのにとか。

(定池委員)

確かに話す人がやっていないってことで恥をかくっていうよりも、見た人が励まされるような、モチベーションを持てるような、頑張ろうって思えるようなコメントをしてくれる方が、出る人も役に立てる感じもあるし、見る人にとっても良いのではないですか。

(鈴木委員)

コメントする方は一般市民の方ですか。

(事務局)

普通の街頭インタビューを想定してまして、一般市民の方がどんな備えをしているか。

(定池委員)

それがもし DVD に残りますって言われたら結構嫌だと思うのですよね。自分だったら、私していませんって言ったのが未来永劫残るのですよね。そしてそのあと頑張るようになったとしても頑張っていないときの自分のコメントがずっと残るのですよね。それが市民の人っていうのは、そこまで考えて対応してくれるのか分からないのですが、その人にとってあまりいい残り方じゃない気がするのですよね。

(鈴木委員)

でも事前に説明してからインタビューをすると、正確な答えにはならないと思うのです。

(定池委員)

ニュースとかでも残ったりしますけど、流れて終わるものなのでまだいいですけど、残るものだと心理的に気の毒な気がするのですよね。ここはこだわっているわけではないのですか。

(事務局)

こだわっているわけではないのですが、導入として、岡田委員長の言葉から始まるのも格調が高いのですが、一般の方に親しみやすい始まりとしてアンケート結果なりインタビューなりから誘導していきけるようにという方向性で考えた一つの案ですので、ここを強くインタビューしたいと思っているわけではないです。

(鈴木委員)

同じインタビューをするなら、先ほど榎本委員が言ったようにあの時やっというておけばよかったのに、あるいはやっというのおかげでなど。

(甲谷課長)

今回の HP もそうですけど、出だしについては、アンケートなどを使うと、まだやっていないところから始まってしまいますが、実は結構始まっているよということを、たくさん事例を出してという刺激をしたいとも思っています。やっていないところから、さあやってみようというより、始まっているのだからみんなもっと情報共有しながらもっとやろうというスタンスが良いと思うのですよね。ですからインタビューでやっていません、から始まるのは悲しい。やっていないと、みんなも安心してやらないのではないかな。なんだ、うちの町もやってないけど他の町もまだゆったりしているのだというよりは、他の市町村もやっているのだったら、うちもやらなければだめじゃないかという刺激をしようというのも大事だと思います。

(定池委員)

こういうのをやるといいよとか、こういうのをやっというてよかったとかやればよかったというアプローチもありますし、チャプター2に繋がるようなイキイキと防災教育を頑張っている姿を映して、頑張っている人たちがいるのだっていうのがあって岡田委員長の頑張ろうよっていう話に入っていくとか。そし

て、具体例を見ていきましょう、でCHAPTER2に入っていくとかっていうやり方もありますよね。まずパッと見て導入なので頑張ろうって思えるような。

(鈴木委員)

つかみね。災害のDVDっていうのは大体悲惨な場面から始まるのですよね。この時に被害を受けないためにどうするかっていう。恐怖感を与えることはあまり教育にとってはいい話でもないよなっていうところもあるのですよね。怖いからじゃあ何とかしようっていうのは、一瞬見たときだけ覚えているのだけど、次の日には全部忘れちゃうということになってくるので。あまり教訓めいちゃうのはちょっと。

(岡田委員長)

ありがとうございました。それでは意見を参考に仕上げを考えてほしいと思います。

(事務局)

DVDの構成で、エンディングについてですが、地域防災マスターのインタビューで終わる形になっているので、何か別のほうがいいような気がするのですが。

(定池委員)

確かDVDの使い方の確認を何度かこの委員会でしたけれども、通しで見るというよりはCHAPTERで見るイメージでしたよね。地震の場合はこれ、この場合はこれっていう感じだったと思うので。となると、CHAPTERで出しても地域防災マスターのインタビューは見るのでしょうか。もちろんこの防災教育でこういうやり方ありますよ、として見て、地域防災マスターの方が自宅学習でDIGやりたいっていう方が見るよりも勉強会とかで上映するときに防災教育を頑張ろうっていう岡田委員長のCHAPTER1を見て、その最後に地域防災マスターの方が見るっていう感じになるのですかね。地域防災マスターや地域防災リーダーの方が自宅学習をするときに見て、よし自分も頑張ろうって励まされて終わるためのCHAPTERなのか。また違う使い方をするのか。

(岡田委員長)

最後はなるべく明るく締めた方が良いでしょう。色々な階層の人たち、子供も含めた形で何かをやっているような動画で締めるような。それに取り組んでいるよっていうそういうイメージで。

(鈴木委員)

せっかく実践でこうやっているわけですから、受けた人たちが最終的にこういうことやりますっていうのが最後にあればいいですけど。

(定池委員)

親子連れの方が、防災グッズ揃えましたなど。あと、地域防災マスターの方は比較的年齢層が高いですよね。未来となると人生の先輩たちの言葉も大切ですし、未来を創るっていうイメージで若い人たちとか子供が出てくるような終わり方だと明るい感じになりますよね。

(鈴木委員)

子供たちが防災グッズ買ったり、气象台の方に色々教えてもらったりっていうのがあればいいですよ。

(定池委員)

皆さんの取り組みが初めの一歩か、次のステップに進む大切な一歩で、そこから防災教育の活動が広がっていきますよというように。

(甲谷課長)

時代も繋がってずっと続くのだよっていうことが大切。

(定池委員)

活動が世代も繋がって、横も繋ぎ縦も繋ぎみたいな大切な一歩ですよっていうことになると、よし頑張るぞとなって。

(岡田委員長)

ありがとうございました。出だしとエンディングについて貴重なご意見を頂きました。

(甲谷課長)

細かいところは事務局で詰めながら、必要に応じて、委員の皆様にご相談させていただきます。よろしくお願ひします。

(岡田委員長)

それでは引き続き、協議事項2の道の支援事項に関する意見交換について事務局から説明をお願いします。

(事務局)

【資料5-1、5-2、5-3について説明】

(岡田委員長)

ありがとうございました。前回の議論で資料5-2に関してはその後のメールで回答してもらった件ですが、今回で中間のまとめとしては最終案として確定させて頂きたいと思いますが、いかがでしょうか、何かございますか。

(平岡委員)

資料5-3についてですが、色付けしたのは後ろの方で意味合いがあったのですか。具体的な取り組みというのは取り組み概要も含めて、平成26年ということなのですけど、目標の年度というか、最後はどのあたりを目標としているのかというのはあるのでしょうか。3年か5年か10年か分かりませんが。

(甲谷課長)

今のところ、例えば3年間を強調年間とするといったような議論までまだ至っていません。まずは加速するためにアクセルを踏む。100年後の子供たちもちゃんと備えている社会を作らなくてはいけないので、その成熟度を見ながら、その手法は10年後には変わっている可能性もあるのですが、ただ、備えよう、学ぼうという意識はずっと変わってはいけないと思うのです。手法は色々な機関が入ったネットワークの中で常に持続したり、今の新しい時代には何が必要かということはみんなで意見交換をできるような仕組みにして、長く続けるということに主眼を置きたいと考えます。

(平岡委員)

かなり色々な取り組みのメニューというかレパートリーが豊富にあるので、マンパワーもあるし予算のこともあるし、やっぱりある程度の年次を想定しながらそれぞれのステージに大体何年くらい、というのが必要になってくるのかなと。これをいっぺんにローラー的にやっていくのは厳しいのではないかなと思っていましたのですけれども、まあ、後程ネットワークの話に関連すると思いますが。

(岡田委員長)

ありがとうございました。他にいかがでしょうか。資料5-3は、かなり詳しく出ていると思いますけれども。

(甲谷課長)

そうですね。先般まで皆様方に作って頂いた中間とりまとめの裏にあった機能について、具体的に何を整理させて頂いたのが資料5-3です。今年の調査、集めている資料、取り組み事例などをベースにしてポータルサイトからうまく発信していくということが一つと、これから作ろうとするネットワークの中で皆さんと情報共有したり共同でステップアップしていくような視点での取り組みになっていると思っています。

(岡田委員長)

何かご意見はございますか。今の平岡さんの意見に関してなのですが、サステイナブルということを考えて永続的ということの一つ望ましいベースとして、必ずあると思うのですけれども、もうひとつはメリハリをどうつけるかということなのですよね。当面3年間を強化年間としてやっていくとか、そこで中間見直しみたいなものやることによって、その先を睨んでいくとか、そういうこともあった方がいいのかなと。そうでないと予算、査定する側もこれはどうなっているのだと、必ず言われるに決まっているので、今やりやすい社会環境下にあると思いますので、当面3年あるいは5年間を強化年間として、とりあえずスタートさせたことの充実化を図るという。その中で色々な取り組みをやってみて、さらにサステイナブルに続けていくべきはどの部分かということ、あるいは新しく取り入れていくのはどういう部分かということを一明らかにしていくというようなロードマップがどこかにあるといいと思いますね。その時に、全国の都道府県の中で災害に頻繁に襲われる率の高いようなところが、同じようなことやっている可能性あると思うのですよね。それからこれが出ることによってそうでないところにもかなり火をつけることになると思うので、全国的にどう動いていくかという問題との兼ね合いもあるの

で、それも一方で睨みながら強化年間の後、どういう形をとっていくかということを見極めていくというようなことにおいたらいかがでしょうか。

(定池委員)

情報提供なのですけども、この前、静岡県庁に伺ったときに、静岡県は毎月1回DIGとHUGを体験できるような講座を設定して、県の防災センターでやっているのですが、例えば他県とかの方でDIGやHUGを教えて下さいという人はそこに来て下さいということにしているらしいのですね。県としては市町村でどのようにDIGやHUGを実施しているのかを、毎年照会して数を挙げてもらうらしいのですけれども、昨年度は、実施が年間144回でどちらも延べ1万4千人から5千人が県内で受講しています。それは県が主催しているのではなくて市町村が主催しているものや他団体で主催しているものを把握して、県で挙げていくらって言っているのです。それを継続していつているからこそ、その数字になっているのだと思うので、そういう、道として市町村の取り組みを集計していつて、どのくらい伸びたかみたいなことも自主防の結成率だけではなくて、そういうところで評価する自己目標と、どれだけ進んでいくかで強化年間の間にどういう成果が出て、次の三年間でじゃあどこを強化していきましょうかという戦略に繋げていけるのではないかというふうに思います。

(鈴木委員)

クロスロードの指導者の行政講座とかはやらないのですか。

(定池委員)

気象台とかが、各地方気象台で、年に一回、地域防災マスター向けのフォローアップで地域のハザードについて研修しますとか、ネットワークの中でそういう連携が出来ていくと楽しいのかなと。

(榎本委員)

水面下ではそういう動きがあるということで考えてはいますけれども。

(定池委員)

やはり市町村の方と話しているとそういうニーズを聞くのですね。自分達のエリアのハザードをもう少し理解したいとか。活動を展開していくために。

(鈴木委員)

そうですね。行政の職員ばかりでなく、そういったことの講師役になれる住民に対して、そういったことを作っていくと楽だと思うのですね。誰かに頼まなくてもいいですからね。自前でできる。

(定池委員)

キーパーソンになる人たち、フォローアップもそうだと思うのですが、キーパーソンになる人々を教育して、その人たちが地域の中で活躍してもらえようようなバックアップも機能の中に入っているとことだと思えるのですけれども、それを進めていつてほしいなと思います。

(岡田委員長)

関連した社会的な防災関係の取り組みでは、ジオフェスティバルというのが結構各地で行われているのですよね。釧路で行われているのが来年の一月で3回目になるのですけれども、2回目には1日で800人集めたのですよね。博物館とか子供遊学館とかいろんな組織がありますよね。釧路の大学とかそういう組織が全部連携して、気象台も参加していますけど、それぞれ出店をやったりイベントをしたり、子供たちに教えて発表させたり、そういうようなこともやっているのです、そういうものともうまく組み合わせると非常に良いと思いますね。

(甲谷課長)

まさに今、防災教育が大事だと世の中でいわれていて、取組を始めた個別の団体や企業やNPO、それから行政機関があります。皆さんバラバラに、細い糸はたくさん出ているのですけど、それがあまり発信されておらず、やっていないように見えたりしている部分あると思うのですね。それを今回のネットワークでは束ねて発信する、こんな大きな流れだし、みんなでやろうよという、潮流を作っていくということもあります。今、委員長がおっしゃった事例も、その束の中に入って頂くと、こういう風にやれるのなら、うちの地域でも、うちの団体でやろう。例えば道南の地域だったら道南の災害についてもっとみんなで色々な機関が連携して勉強して、開発局も道も気象台も他の皆さんもいるので、そこで皆さんが連携して新しいうねりが生まれるということを期待したネットワークになればと思います。

私たちが恥ずかしいですけどジオフェスがあるということもあまりよく知らなかったり、全然関連付けられないままそれぞれが走っているのがもったいない気がします。

(岡田委員長)

同じようなものとしては、この前、胆振総合振興局でやった胆振三大遺産というものについてもいっぱい出展していましたよね。ああいうのは親子がいっぱい来るのですよね。ですから、そういう中に防災も一緒に入れてしまう。もちろん、あれもちゃんと洞爺有珠ジオパークに入っていますから。色々なやり方があるので、近代社会、特に少し大きな中核都市だと、大学があったり研究所があったり博物館があったりいっぱい人がいるのですよね。でも普段みんなバラバラなのですよ。それを一年に一回まとめて地域の防災、地域の活動の中に組み込んで、お年寄りがはっちゃきになってやりながら、親子呼んでとかそういうようなことやると、防災士とか地域防災マスターという人が本当に活躍できる場を作れると思うのですね。

(鈴木委員)

色々なイベントがあると思うのですよね。上田委員のところで行っている救助技術の全道大会指導会もあるのですけど。そこに着ぐるみを着たヒーローが出てくると子供達が山のようなのですよね。その時に色々なものを見せて、起震車を持ってくるとか出店を出してそこでやってはいるのですよね。大きいイベントだって作れるわけですから。そんなことをやっているってみんな知らないから誰も出てこないっていうか、関連の人しか出てこない。

(岡田委員長)

起震車ってありますよね。あれも 3.11 の後、ずいぶん各地から呼び込みがたくさんあって、僕は伊達市しか知らないのですけど、いないときが非常に多いのですね。ですから、そういう日本しか持ってないような、他にもあるのでしょうか、そういうたくさんあるものを有効的にうまく噛み合わせるというか、仕組みを作っていけるといいですよ。

(定池委員)

新しいことはもちろん始めていきますが、ジオフェスとか既にされている防災、防災をうたっているものであれば、防災に繋がるもの、活動もどんどん発掘して行ってネットワークの中に入って頂けるような、両方出来ていくといいですね。

(甲谷課長)

既存の色々なものにちょっと防災の視点を入れていくと、新たに大きいものをしなくても、そこに色々な防災が、イツモ防災に繋がるように入っていくことも重要だと思います。

(定池委員)

ブースの一区画、隅をお借りして何か出させてもらうとかだけでもだいぶ違うと思うので。

(甲谷課長)

主目的じゃないけどしっかり学んで帰りたいな。

(岡田委員長)

北海道の地域防災マスターの制度は、中身はあまりよく知らないのですけれども、その中で特に核になるような人たちを作り上げていくような制度にはなっていますか。横並びの制度だけがあるだけなのですか。

(甲谷課長)

認定研修を受けた方が地域防災マスターとして認定されます。例えば十勝においては、十勝振興局が事務局を担って皆さんの要望もあったのでネットワークを作りました。十勝に住んでいる希望者が、色々な地域のイベントにお手伝いに行ったり、というネットワークです。それから恵庭市は市内に 150 人程、地域防災マスターがいるので、これは市としても活用させて頂かない手はないということで、市が主催の地域防災マスターの会議をやって、市はこんなことを考えているので、どうぞよろしく、という繋がりがつくっています。

(定池委員)

厚真町での例ですが、地域防災マスターは地域で 10 人いて、この前の苫小牧の研修会にも何人か参加されたそうです。なかなか活動の場がなかったということで、町の防災の方とお話をして、まず地域防

災マスターを集めてキックオフミーティングをやろうと。この方々が地域のキーパーソン、防災の核になっていただこうと考えています。地域防災マスターの方々と一緒にこれからどんな活動していこうかと、みんなで夢を描くのをまずやってみようと考えています。その上で来年度、地域でどういう活動していこうか、そのためにどんなスキルアップが必要であれば、例えば气象台に来てもらって10人くらいだけいろいろな教えてもらう機会を持つとかっていうことをして、地域の中でどんどん出ていってもらえるようにしていこうかなっていう、そういう構想です。あとは、地域防災マスターは研修が1回で終わりですよね。例えばDIGも5回やったらブロンズとか、ブロンズ、シルバー、ゴールド、プラチナみたいに、スキルアップしたらランクアップというか、こういうこと出来ますという認定をしていくのはどうでしょうか。やる気のある方達なので、自己研鑽して頂くと更にその人たちの地域防災マスターとしての付加価値が高まって行って、地域の方もこういうことができる地域防災マスターさんだったらDIGをお願いしたいとか、こういう講演をお願いしたいっていう風に、アプローチをしやすくなると思うんです。ぜひ、研修の中でも地域防災マスターがより活躍して頂けるような仕組みっていうのもご検討頂ければと思っています。

(岡田委員長)

そうですね、そういう人材を育成する仕組みですね。

(甲谷課長)

地域防災マスターのお名前とそれぞれの活動状況というのはHPで全部公開しているのですね。ですからこれから整理するポータルサイトに入る人材情報の中でも、地域防災マスターの名前と取組のページがリンクして、紹介する機能もしっかりさせて頂きたいと思います。

(岡田委員長)

ありがとうございました。時間もありますので、次に進めさせていただきます。

引き続きネットワーク型での推進についての説明です。

(事務局)

【資料5-4、5-5について説明】

(岡田委員長)

ただ今ご説明頂きましたネットワーク型推進機構とイメージ、スケジュール案などですね、今後の進め方についてご意見がございましたらお願いいたします。先ほど平岡委員も言われた、長い意味でのタイムスケジュールの中で出だしをどうやっていくかという話になるかと思うのですがいかがでしょうか。

(平岡委員)

このネットワークを最初に聞いた時から非常に重たいというか、大車輪で回るのはしんどいのではないかなと実は思っていますね、そういう横綱相撲からやっていくのもいいのかもしれないのですが、先ほどのアンケートにもあって、いまお話し出ていましたけれども、その地域防災マスターですか。色々なところで防災にセンシティブに反応される方っていうのですかね、今回のモデル事業の講師の方もそうだと思うのですが、そういう方々から何かを生んでいくというか、そういう方々を通じて輪を広げていくようなやり方もあるのかなと思ってですね。とにかく全市場に向けて一斉に商品を出していき、絞りを広げていくのか、絞りを絞っていき、まずは段階的にやりながら関係者のネットワークで広げていくというやり方が、私としてはそっちの方が今の状況にかなっているような気もして、ちょっと考えあぐねているところなのですが、将来的にこういったものができればいいなということの押さえなのか、これは、即立ち上げて運用していくというそういったお考えなのか。そこは道の判断になるのかとも思うのですが、一番は、作った暁には冷やさないということが、自分の経験から言っても1、2回やった会議の中で何を求めているのかという、ただの連絡会議のようになってしまうとどんどん冷めていってしまうので、ある程度、作ったら最後、そこはもう常に煽ってその先を見ながらやっていくという、そこは多種多様な構成員をまとめていく部分で、非常に私は個人的に重たいのではないかなと、経験から言うと、そう思っているところです。

(岡田委員長)

はい、ありがとうございます。ほかにございますか。

多分この全体の流れの中で、先ほどもご説明あったと思うのですが、この防災教育推進フォーラムというのが来年度の事業の1つの核になるのですか。あと、継続的にやっていくものは別として、中身、イメージというのはどういう風になっているのでしょうか。

(甲谷課長)

来年度のこのネットワークは、ガチガチの大車輪よりちょっとゆるい感じのものです。基本は資料5-4の一番下にあるように、みなさん個々の取り組みを緩めずにやってくださいね、やりましょうということです。例えば町内会連合会は町内会のこといろいろやっているけれども、その中には確実に防災の切り口があって、防災の補助金を持っていたりしているのですけれども、そんなにみんな知らない。男女共同参画の人たちが、いろいろ普段から男女共同参画のことを考えているのだけれども、防災の視点で、じゃあ女性はどう活躍していったらいいのかなということも、テーマの1つに入れていこうとか。防災をいろいろ意識しているが、どうやっていったら分からないといった、団体ですとか個人ですとか。企業やメディアとともに防災の番組を作るとか、色々な取り組みがあるので、その取組とは皆さん継続し、それぞれの情報を束ねて発信しよう。連携して一緒にやろうという一体感みたいなものを作っていきたいというのが1つです。ですから、会議でやってこれを決めなければ次が進まないとか、あるいはこの会議がすべてを背負って、年間事業計画みたいなものを作って、それに沿ってお金を集めてやるとか、そういうイメージではない。情報共有、一緒に発信しようという緩やかなネットワークのイメージで考えています。基本は、それぞれががんばる。でも情報をもらってそれぞれがレベルアップするし、協力するというイメージで進めたいということ。3.11 からだんだん時間が経っていくからもう1回ぐつと進めるにはアクセルを踏んでみんながやる気になるインパクトのあることをやらなければいけないということで、今年度、ポータルサイトもでき、情報も整理したので、さあ、みんなでやろう、やろうと思っている人の情報を束ねて発信して、勢いをつけたいというものです。その中で1つ何かそれを見えるような形として、フォーラムみたいなものを、皆さんとタイアップしながら出来ないか。例えば防災週間のどこか、あるいはもうちょっと違う時期に、面白い企画がネットワークの1つの形として企画できればと考えています。それはまだ具体的にこの日にこんなものというところまでいっていませんが、そこに沢山の人たちを入れながら何かしたいと思います。HPやメルマガの中で色々なことが動いて、みんな情報共有し、私たちの知らないところでAさんとBさん仲良くなってタイアップして、新たなものも生まれているかもしれない、というものを狙いたいと思っています。

(岡田委員長)

ありがとうございます。そうすると、このマークの中の、色々なイベントというのは、緩やかに行われている、そんなものをある程度集めるものとしてフォーラムを考えているということでしょうか。フォーラムっていうと中身が見えないのですよ。パネラーがいて何か喋っておしまいなのか。多分そんなのやってもしょうがないっていう、あるいはお祭り型の出店が出て親子連れでワーツとくるような、横の繋がりを持てるような仕組みも同時にやってしまおうと。それは非常にいい案だという気がするのですけども。

(甲谷課長)

そうですね、もう少し検討してみます。

(岡田委員長)

今言った中で検討に入り込むことができるような、榎本さんいかがですか。

(榎本委員)

資料5-4のネットワークのところを感じたのですが、これは今までのものを整理されたということですよ。今までは、資料5-2にあったのですけれども、外側のネットワークが少なくなったような印象を受けました。例えば民間企業はどういう形で入ってくるかっていうのも最初気になっていたのですが、資料5-4を見ると防災協力協定企業等の等に入っているのかもしれないのですが、限定的なイメージを受けるかなと思います。研究機関というところと教育機関ですよ。大学はどちらに入るのですかね。

(事務局)

教育機関の吹き出しのところですが、あまり色分けにはこだわっているわけではないので、ある程度イメージがつくようなカテゴリで整理しただけです。

(榎本委員)

最初のイメージでは、今まで防災という冠がついてないところもどンドン中に入れていこうというイメージを持って、意図的に名前を出してきていたと思います。例えば観光関係とか医療関係とかついているのが入っていたような気がするのですが、この新しい図を見ると、冠には防災がついていそうな機関ばかりに見えます。民間企業は防災とは違っているのかなと思ったのですがけれども、それも防災協力協定企業となると、全部防災がらみのところでまとまっているという風に、個人的にはそういう印象を受けたのですが。

(甲谷課長)

絞られたわけではないので、その印象にはならないように気を付けたいと思います。

(定池委員)

最初に、いわゆる防災関係、それに防災を色々されている団体はコアで入っていて、そこから色々なジオフェスのグループであるとかに広げていくみたいな感じのイメージがあるといいのではないのでしょうか。ここで完結してしまうようになると、狭まったイメージにはなりますよね。

(甲谷課長)

右側の下にある連絡会議が、いわゆるコアメンバーになっています。その他は、例えばメディアとか、企業においても防災協定企業じゃなかったら入れないのかということそんなことはないもので、広がりをもっと作りたいですね。表現はもう少し考えます。

(榎本委員)

なるべくすべての人が関わっているというイメージで。

(岡田委員長)

この丸の中の小さい丸が、今の話だと頭に全部防災がついているという意見がありますけれども、こういうところに出前事業とかジオフェスティバルとか防災グッズとか博物館、科学館イベントとか、今まで防災で取り込めていなかったけれども、そことリンクした方がいいよというものを入れることは無理ですかね。

(事務局)

わかりました、そのあたりは検討します。

(岡田委員長)

他に何かございますか。時間が過ぎていましたね、ごめんなさい。それではまた何かありましたら事務局の方へお願いいたします。

ありがとうございました。委員の皆様から、防災教育を推進していくための、センター機能のあり方やネットワークのイメージなど、検討を進める方向性について具体的に御意見を頂きました。事務局におかれましては、頂いた意見をベースに、まとめに向けて繋げて頂ければと思いますので、よろしくお願い致します。

続きまして、協議事項の3「今後のスケジュール」について、事務局より説明をお願いします。

(事務局)

【資料6に基づき説明】

(岡田委員長)

ただいま、事務局より説明がありましたが、何か、ご質問等はございますでしょうか。

それでは、基本的な検討事項やスケジュールにつきましては、このように進めさせて頂くということでもよろしいと思います。最後に、次第のその他についてよろしくお願い致します。

(事務局)

【次回会議の日程等について説明】

(岡田委員長)

ありがとうございました。モデルテキストやDVDなどの詳細につきまして、皆様からご意見をお待ちしております。それでは、これもちまして、第6回会議を終了いたします。

